

# 東マレーシア・ドゥスン族社会における「家」

—社会集団としての特徴を中心に—

## The “House” in the Dusun Society, Eastern Malaysia: it's Features as Social Group

三 浦 哲 也

MIURA Tetsuya

The Dusun people at the village located in northern mountainous area in Borneo island dwell in wooden houses by an each unit of family groups. This article aims to report the significance of the “house” as a social group in the Dusun Society, well-known as a cognatic society, with rich practical data. The concept of the “house” is based on the Levi-Strauss's argument. According to his discuss, the “house” is a community holding peculiar property and symbol, and is a very practical social group in the meaning of that members of the group themselves are contributing to the sustainability of the community. And then, opposing concepts in anthropological arguments, like patri-lineage corresponding to matri-lineage, parents and their children to residents, are reunited under the concept of the “house”.

### はじめに

文化人類学における親族研究では、1970年代までに、親族をモデル化したり分類したりする方法は膠着し、それに代わって、日常的な行為そのものに着眼した研究手法が登場した。それは、社会内の理論的・規範的なルールではなく、毎日の社会生活の中で構成される関係性を、人々の実際の行為の側面を分析することから解明しようとする方法である。そのような方法の一つとして、レヴィ＝ストロースは「家」の概念を提示した (Levi-Strauss 1982, 1987)。

ボルネオ島にはいわゆる「双系 (cognatic)」と言われる社会が多く見られる。本稿が分析の対象とするボルネオ島の北部、マレーシア・サバ州の山間部に居住するドゥスン族の社会も、いわゆる「緩やかに構造化された社会体系」(Embree 1950) といわゆる双系社会である。本稿は、レヴィ＝ストロースの「house」の概念を手がかりとして、ボルネオ島のいわゆる双系社会における「家族

的な集団」について分析を試みるものである。

## I 「家」概念について<sup>1</sup>

ラドクリフ＝ブラウンを創始者とする構造＝機能主義人類学は、「未開社会」の中にある単系出自に注目することから始まったといえる。それは、民族社会に、基本的な社会単位としての父系あるいは母系の単系出自集団の存在を指摘し、それらの相互作用によって社会が存続し、機能するという社会構造論であった。そこでは、非単系あるいは双系社会は例外的なものとして、研究対象から除外されていた。

しかし、1960年ごろから、単系出自集団を対象とした社会構造の分析の限界が指摘された。これは、オセアニアや東南アジア地域の調査研究から、単系出自集団が存在しない社会に関する報告が蓄積されたためである。1950年代、グッドイナフがギルバート諸島で、ファースらがマオリ社会で、それぞれ双系出自集団の事例を報告するとともに、その理論化が行われた。さらに、マードック (Murdock 1960) は、世界の諸民族社会の少なくとも3分の1が非単系社会であると述べ、単系出自理論に基づく従来の社会構造研究は理論的妥当性を失い、これ以後、単系に限らず双系社会を含めた新しい親族論や、社会構造論の議論が進められた。

その中で、フリーマン (Freeman 1960, 1961) によるボルネオ島のイバン族を事例とした親族論は、以後の研究に大きな影響を与えた。イバン社会には個人を起点として自己中心的にたどられる双系親族カテゴリーとしてのキンドレッドが存在しており、このキンドレッドの連鎖を利用すれば、単系出自集団に類似する固定的な団体が無くとも、目的に応じた集団が適宜編成されうる、と指摘したのである。

このように1960年代には、親族研究を中心とする社会構造研究が盛んに進められ、新たな分析用語が次々と提唱され、社会構造の様々な分類が試みられたわけだが、リーチやニーダムらは、あまりに恣意的な親族体系の分類や体系化を批判し、親族研究における一般理論の構築そのものを否定した。そのため、1970年代半ば以降、親族それ自体は独自の研究対象となりえないとされ、親族研究は「終焉」を迎えたとされてきた。

ボルネオ島諸民族の社会構造研究においても、親族研究の過度な偏りが批判された。特に、アッペル (Appell 1976) らは、キンドレッドのような親族関係を偏重するのは不適切であると指摘し、キングも居住もしくは世帯 (household) を重視することを提案した (King 1978)。

先に述べたような親族研究における「モデル作り」や「分類」は、実際の民族誌データによって否定され、規範や規則によって社会生活が統御されているという考え方も、否定されたのである。カーステンとヒュージョーンズは、「人類学者はこの30年、モデルに完全に一致するような社会を

1 ここで概観する社会人類学史の流れとレヴィ＝ストロースの「家」概念については、清水 (1987)、上杉 (1999b)、小池 (2003) 等を参考にしている。なお、日本においてレヴィ＝ストロースの家概念を最初に取り上げたのは遠藤 (1989) であると思われるが、その後、小池によるインドネシア・スンバ社会の研究 (小池1989, 2005ほか) を皮切りに、「家」研究が展開されている。

見つけようとしたが、そんなものはありもせず、…古い議論に依存してはkinshipの新しい理論は生み出せない」(Carsten & Hugh-Jones 1995: 19) と述べている。

親族をモデル化したり分類したりする方法は膠着したわけだが、それに代わって、日常的な行為そのものに着眼した研究手法が登場した。それは、社会内の理論的・規範的なルールではなく、毎日の社会生活の中で構成される関係性を浮かび上がらせようとする方法である。

そのような方法の一つとして、レヴィ=ストロースが呈示したのが「house」の概念であった(Levi-Strauss 1982, 1987)。それまで用いられていた親族用語では、社会単位を十分に特徴付けることが出来ないという視点(Kuper 1982など)や、Bourdieu (1977)が調査対象の社会の人々自身が持つ概念と用語の重要性を指摘したことなどから、それ以後、この「house」の概念を用いて、あるいは批判しながら、世界各地の社会についての分析が行われることになる(Errington 1989, Waretson 1990, McKinnon 1991, Carsten and Hugh-Jones 1995, Joyce and Gillespie 2000, 小池 2005)。

レヴィ=ストロースは、「*The Way of the Masks*」(1983)において、北アメリカ北西海岸のクワキウトル族とユロック族の親族体系の事例から、社会を統合する親族組織の焦点として機能する住居に着目した。レヴィ=ストロースは、そのような様式を持つ社会を「house society」と呼び、ヨーロッパや日本の封建制、フィリピン、インドネシア、マレーシア、ポリネシアの社会など、歴史的にも地理的にも広大な範囲で、その存在が確認できる、とした。

レヴィ=ストロースの言う「house」とは、共同体であり、時には非常に大きく、居住地・生業・生産方法・血統・宗教活動・抽象的要件によって組織され、その構成員は全員、「house」自体の維持存続に貢献する、という実的な社会集団である。「house」は、共同財産の保持に関わる行動によって定義され、また社会的に再生産される。

彼は、「house」の概念を、family, lineageあるいはclanなど同じように、一つの「社会構造のタイプ」として、以下のように定義した。「(houseとは、)物質的および非物質的な財産からなる資産を持つ共同体である。そしてその資産は、その名前、財物、タイトルが、実際のもしくは仮定の系譜に沿って継承されることによって継続する。その継続性は、親族とか姻族といった言葉によって説明されうる限りにおいて、正当化される。」(Levi-Strauss 1983:174)。そして、人々はクランやリネージに所属するように、「house」に所属し、そこからアイデンティティを得、また彼らの社会的な相互行為が規定されるとしている、とした。

カーステンとヒュージョーンズは、上記のようなレヴィ=ストロースの「house」の概念を応用し、建築物としての家の特性、家に居住する人々の社会集団としての性格、そして象徴的なカテゴリーという三者間の相互関係から、人々の生活のプロセスをホリスティックに捉え、丸ごとのhouseを分析することを提案している(Carsten & Hugh-Jones 1995)。

本稿では上記のような議論を踏まえ、研究対象であるドゥスン族社会の親族関係の広がりの中で、唯一、社会集団として人々を区切る枠組みとなっている集団を、レヴィ=ストロースの言う「house」として分析することを試みる。

## Ⅱ 調査地およびドゥスン族について

本稿で分析の対象となるドゥスン族は、ボルネオ島の北部、東マレーシア・サバ州に居住するプロトマレー系の人々である。伝統的には水田および焼畑での稲作を主たる生業とし、精霊に対する信仰を保持してきた。しかし、イギリスによる植民地化以後はキリスト教の布教が進み、また英語教育の普及により、植民地政府の官吏や実業家になる者も増えた。現在は、農業従事者も多くいる一方で、都市でホワイトカラーとして生活する者も多い。

彼らを指し示す民族名称は、これまで様々な政治的背景や民族文化復興運動などの文脈の中で、様々に転変してきた経緯がある<sup>2</sup>。現在、「ドゥスン族」は、公的機関や人口統計、特に政治的な場面においては、サバ州西海岸に居住する「カダザン族 (Kadazan)」を称する人々をはじめとする複数の民族集団とあわせて、「カダザンドゥスン族 (Kadazandusun)」と集合的に称されるのが一般的となっている。

しかし、筆者が調査対象としている、サバ州の内陸部に位置するタンブナン郡に居住する人々は、自らを「ドゥスン族」と称し、「カダザン族」とは言語や習俗が異なっていることをしばしば強調する。本稿においては、「ドゥスン族」という名称を、「カダザンドゥスン族」と呼ばれる人々のうち、タンブナン郡に居住する「ドゥスン族」を自称する人々のみを指すものとして使用する。

本稿で提示する資料は、サバ州の州都コタ・キナバルから南東へ60キロほどの山間部に位置する、タンブナン郡KN村（仮称）において、1998年から2006年にかけて実施した調査にて得られたものである。KN村は、2007年3月の時点で、37軒の家屋に、230人のドゥスン族の人々が居住する村落である。川沿いの谷筋に3つの集落が点在しており、川べりの狭い平坦地に水田が開かれ、また周辺の丘や山の斜面では焼畑が切り開かれ、稲作や換金作物栽培が行われている。稲作を中心とする農耕と、狩猟や漁労を組み合わせ、自給自足的な生業経済を維持している村落である（三浦2001）。

## Ⅲ 社会集団としての「家」=*lamin*と、その構成要素

### 1. ドゥスン族の村落社会の「構造」

ドゥスン族の村落においては、核家族もしくは拡大家族が、木造の個別家屋に住み暮らしている。婚姻については、原則として第3イトコまでがインセスタブーの範囲とする規則がある。一方で、婚約した後の一時期を妻方で過ごすことはあるものの、基本的には夫方居住となる。

そして、ドゥスン社会には、キンドレッド関係が双方向的に広がっており、いわゆる出自集団は存在しない。つまり、親族は分節化されることがないのであるが、その茫漠と広がるキンドレッド関

2 現在サバ州となっている地域（旧・英領北ボルネオ）の先住民は、1963年にイギリスから独立してマレーシア連邦に加盟する際、自らの権利を守るべく「カダザン族」として結集し、マレー化、つまりイスラム化されない保証を獲得した。その後、「カダザン族」の民族文化運動が隆盛する一方で、それが指し示す民族集団の範囲をめぐる激しい議論が交わされた（山本1993, 2002, 2006, 上杉1999a）

係に、区切りをつけるのが、「家」、すなわち、レヴィストロースに「house」と当たる集団である。

ドゥスン語において、建物としての「家屋」と、「そこに住む人々」、この2つを含意する言葉として、*lamin*がある。この*lamin*は、レヴィストロースの言う「house」に該当し、親族の連なりの中に唯一存在する社会集団として、人々を区切る枠組になっている。また、*lamin*は、生産と消費の単位であり、と同時に村落における政治や祭祀儀礼などの単位でもある。

### <事例1>近親相姦事件

2005年1月、20代後半の男性A.M.が近親相姦を犯すという事件が発生した。A.M.は、妻子をKN村の父親の*lamin*に残し、サバ州東海岸の都市サンダカンに出稼ぎに出ていた。しかし、一時的に帰省した際、隣村に住む、A.M.にとっては第一イトコの娘にあたる10代の少女を誘い出し、性行為におよんだ<sup>3</sup>。

両村の村長と呪術師（K.K. 80歳女性）を中心に善後策が協議され、少女は従属的であったとしてその罪は不問に付され、A.M.のみが処罰されることとなった。しかし、彼はサンダカンへ逃走した。A.M.は妻子共々、父親の*lamin*に所属するため、近親相姦の罪に対する贖罪儀礼への負担は、父親が肩代わりすることになった。

儀礼では、父親が用意したスイギュウとブタが屠殺され、その肉は、大雑把にはあるがほぼ等量ずつ、*lamin*を単位として村人に分配された。*lamin*の構成人数は、当然、それぞれ異なるのであるが、にもかかわらず、肉は*lamin*を単位に等分された。

人々は皆いづれかの*lamin*に所属して生産・消費の生活を営み、それぞれ*lamin*の存続・維持に寄与することが求められる。そしてまた、*lamin*の構成員は互いに連帯して村落への責任を負っている。村落単位で祭礼等が行われる場合の費用負担も、*lamin*を単位として課金され、集金される事からも分かるように、*lamin*は村落社会の構成単位となっているのである。

この社会集団としての*lamin*は、その構成要素を大きく3つに分けることができる。第一はそこに住む「人」であり、第二はその人たちが住まう「家屋」であり、最後はそれが所有する「財産」である。この3つの構成要素を、順次詳しく検討してみたい。

まず、「人」について述べる。*lamin*は、ドゥスン族の社会におけるもっとも基本的で、かつ家族的な集団である。子どもたちは、順次、婚出あるいは独立し、別の*lamin*の成員となり、最後に残った者が、年老いた親から*lamin*を相続・継承する、という「直系家族」の体をなしている。したがって、両親とその未婚の子供、あるいは両親と1組の子供夫婦、という構成、つまり、2世代、もしくは3世代を含む直系家族になるのが一般的である。

そして、誰もが、どこかの*lamin*の成員となっている。個々人は、*lamin*に所属してその構成員となることで、社会的な存在となっている。言い換えれば、ドゥスン族の村落社会は、この*lamin*の

3 ドゥスン社会においては、原則として第三イトコまでの親族がインセスタブーの範囲とされており、近親相姦は極めて重い罪である。

集合体であるとも言える。

次に、「家屋」についてである。ボルネオ島においては、イバン族に代表される長大家屋（ロングハウス）が有名であるが、ドゥスン族は高床式の個別家屋に居住している。伝統的には、ドゥスン語で*bulian*と呼ばれるボルネオテツボク (*Eusideroxylon zwagerii*) を柱に用い、壁、床、屋根には各種のタケ (*Bambusa schortechinii*, *Bambusa vulgaris*等) を用いて造作する。家屋には、広間を中心に台所 (*dapor*) と寝室用の小部屋が配置される。

建物としての家屋の耐用年数は長くてせいぜい20年ほどである。不具合の生じた家屋は放棄され、新たな家屋が建設される。新たな家屋が建設される場合、*dapor*が重視される。次に示す事例2から分かるように、特に煮炊きをする炉が最も重要な場所である。

### <事例2> 呪術師による家屋の建設についての説明

「家を立て替える時は、当然、台所も新しく作るわけだろう。その台所の炉を使い始める前に、前の家から炉の灰と五徳を持って行って、呪文を唱えて、良い精霊を呼び、悪い精霊を遠ざけなくてはならない」

「炉の灰というのは、大事なんだよ。精霊が宿っているから。焼畑が家から遠くて、そこに小屋を掛けることがあるだろう？そして、そこで煮炊きする。そういう時だって、家から灰を持って行くんだよ。精霊を連れて行くんだよ」

「精霊の名前かい？そりゃ分からない。私たちにも見えないし、その時々、その家々でちがうから」

「男が独立して、新しく家を建てる時は、実家から灰を持って行く必要はないよ。だって、父親とは別の家を建てるんだからね。実家から精霊を連れ出してしまったら、実家が困るだろう。呪術師を呼んで、呪文であたらしい精霊を呼んでもらえばいい」

(K. K. 女性 80歳 呪術師)

新しい家屋へ引っ越しする際には、古い家屋から炉の灰を持参し、呪術師による祈祷を行わねばならない。「炉の灰」にはその*lamin*を守る精霊が宿るとされ、引っ越しの際、それを移すことで、*lamin*の呪術的な継続性が保たれることになる。家屋は、この呪術的な継続性を含めて、次世代へと相続されていくことになる。

最後に、「財産」についてである。*lamin*が所有する財産は、大きく分けて2種類ある。

まず1つ目は、ドゥスン語で「運ばれるモノ」と表現される、土地やスイギェウ、ブタ、金銭など、分割して相続すること可能な財産を指す。水田や焼畑用地は、子どもが独立して別の*lamin*を構えるときに、あるいは親の死亡時に、子どもたちが相続する。土地に関しては、KN村周辺地域は、既に政府による土地の登記が進んでおり、当然ながら、登記上は個人の所有ということになり、土地の相続とはすなわち土地の権利証書の相続を意味することになる。

財産の2つ目は、「宝」であり、分割できない財産を指す。最も一般的なものは壺である。高さ40cm～1mほどの大きな壺であるが、結婚式などの儀礼のための酒を醸す時に使用する以外には

用途は無く、普段は棄損と盗難をおそれて、鍵のかかる場所に保管されている。それぞれの壺には固有の名前が付けられており、その来歴についての語りが伴う。家宝の壺は、親から子へ相続され、また、婚資として贈与される財でもある。壺のほかに、真鍮もしくは青銅製の銅鑼や短刀、植民地時代の貨幣などが「宝」と呼ばれて相続されている事例があるが、銅鑼以外は婚資とはならないとされている。

なお、財産は父から息子に相続されるものであると語られることが多いが、女性が土地を相続することは頻繁に起きる。だが、「宝」と、家屋としての*lamin*は、男性が所有するものであるとされる。いずれにせよ、「運ばれるモノ」にしても「宝」にしても、基本的には個人が所有するものである。しかしながら、彼らの実際の語りでは、その財産を所有する人が所属する*lamin*の所有と読み替えられて説明されることがほとんどである。つまり、例えば、妻名義になっている土地について夫は「私の*lamin*のものだ」と説明するし、父が所有する壺について、同居する息子は「私が結婚する時は、あの壺を婚資にする」と断言するのである。

#### IV *lamin*をめぐる実践

前項で述べたように、*lamin*は財産を所有し、生産・消費の単位にもなる社会集団である。そこで行われる人々の行為、つまり人々の*lamin*をめぐる実践の資料から、*lamin*の特徴を明らかにしていきたい。

##### 1. 財産をめぐる実践

まず、*lamin*が所有する財産に対する権利について見てみよう。土地、特に水田や焼畑用地は、彼らの生業の基盤であり、非常に重要である。KN村は、谷筋に位置しており、その地形的特性から、水田は特に貴重な財産であるし、また、集落に近い焼畑用地も高い価値を持っている。それゆえ、それぞれの*lamin*では、なるべく土地を囲い込み、その一方で余所の*lamin*が所有する土地を有利に利用しようとする。要するに、土地を利用する権利に対しては、どうしても競争的になっていくのである。

##### <事例3> 土地の権利に対する対応の事例

J.K.「今日、パラゴムノキの植え付けをしたのは、私の*lamin*の土地だよ」

筆者「でも、登記上は、息子さんのA.J.の土地、ですよ？」

J.K.「その通りだ。だけど、A.J.がこの村へ帰ってきたら、私の*lamin*よりほかに寝る所も無ければ、行く所も無い。だから、A.J.は私の*lamin*の者なんだよ。土地も同じだ。私以外に使う者がいなんだしね」

(J.K. 男性 52歳)

A.J.は、サバ州内陸第一の都市ケニンガウで小学校教員となっている。既に結婚し、ケニンガウに居住しているのだから、別の*lamin*を構えているわけである。該当する土地は、A.J.が、彼

の祖父であるK.BつまりJ.K.の父から現金で購入したものであった。

K.B.は既に高齢であり、自ら耕作することは出来ない。そのため、該当する土地を、在村する娘夫婦に土地を分与することを考えていた。しかし、J.K.はそれを嫌い、息子A.J.にその土地の一部を買い取らせたのだ。

事例3で見られるのは、親族関係の中でも、土地への権利をめぐる、戦略的に立ち回る人々の様子である。もちろん、親族関係の中で、無償での土地の貸借が行われるなど、互助的な関係が結ばれることも多く確認されている。

#### <事例4> 家宝の壺をめぐる

##### [1. 婚資としての壺をめぐる事例]

M.G. (51歳男性・既婚)は、息子A.G. (27歳)の結婚の際、3人の弟と相談の上、末弟D.G.が所有する壺を譲り受けて、婚資とした。

M.G.「私が父から譲り受けた壺は、別の息子の結婚の際、彼の妻方へ贈ってしまった。だから、そのとき、適当な壺がなかった。だから、D.G.に頼み、D.G.が父から相続した壺を婚資にすることにした」

##### [2. 壺の利用をめぐる語り]

J.M. (44歳男性・既婚)の父(2002年死去)は、複数の壺を所有していた。それらは*lamin*とともに、J.M.が相続した。一方、J.M.の兄であるU.M. (47歳)は、以下のように語る。

「あれらの壺は、父のものだった。だから、J.M.のものでもあるし、私のものでもある。あるいは妹(未婚; J.M.の*lamin*の構成員)のものでもある。私たちのものなのだ。壺を使う(ここでは婚資として贈与する、の意)機会なんて、滅多にあるものではない。使いたい者が、皆に許しを得て使えば、それで良い」

J.M.も、これに対して不服はなく、「将来、頼まれれば、U.M.の息子の婚資のために壺を提供する」と述べた。

事例4から指摘されることは、父から相続した壺は、個人が所有するとはいえ、そのシブリング全員に権利の可能性があると考えられているという点である。

*lamin*の財産に対する権利の事例から見えてくることは、血族関係、特にシブリング関係にある人を含む*lamin*同士が、財産に対する権利をめぐる、時に柔軟に、時に戦略的に対応する関係を結んでいるということである。

## 2. *lamin*が生まれるとき

ここでは*lamin*がどのように発生するか、説明する。夫婦は、結婚後しばらくは夫方の両親と同じ*lamin*で暮らすすが、しばらくすると、自分の家屋を構え、新しい*lamin*として独立する。独立をすることと、親の*lamin*を継承すること、その両方ともに価値が認められている。前項で、*lamin*の財



産に対する権利について明らかにしたが、シブリングの連帯に依存することが出来るならば、既存の*lamin*、つまり親の*lamin*を継承することのメリットは少ないと言うことになる。ただし、親から相続できる土地の面積が小さく、また相続する兄弟姉妹が多い場合には、*lamin*を継承することのメリットは大きくなると考えられる。

さて、その一方で、独立とは別の文脈で*lamin*が発生することがある。それは、親世代が、自らの意志で、子どもと*lamin*を別にする事である。これを、ここでは分離と呼ぶことにする。

### <事例5> *lamin*の分離

J.S. (28歳) と妻M.M.(25歳)は、2002年に結婚し、J.S.の両親と同じ*lamin*で生活を始めた。しかし、J.S.の両親とM.M.の折り合いが悪くなった。そして両親(夫S.S.61歳、妻M.K.61歳)は、2004年、集落から15分くらい丘を登ったところにある、S.S.所有のゴム林の中に小屋を建て、引っ越してしまった。その際、台所の灰を移す儀礼を行ったため、S.S.の小屋が、呪術的には正当に旧宅を引き継いだ*lamin*になってしまった。

J.S.の兄弟姉妹たちは、この出来事を、「M.M.が両親を慣れ親しんだ家屋から不便なゴム林の中の小屋へ追い出した」ものであると理解した。これにより、彼らやその配偶者たちはもちろん、村人の間でも、M.M.の評判は極めて悪くなった。

その一方で、J.S.が両親の*lamin*を相続する予定が白紙に戻った。これにより、J.S.の兄弟姉妹たちの中には、自分たちの土地の相続が有利になるかも知れないと期待を語る者もあった。

事例5では、*lamin*のメンバーたちの中で、*lamin*をめぐる様々な思惑が働き、それに基づく彼らの行為の集積の結果として、分離が起きたのである。このような事件は、将来にわたって、いくつかの*lamin*同士の関係そのものに重大な影響を及ぼすと思われる。*lamin*においては、血族関係、シブリングの連帯が、重要な意味を持っているのであるが、結婚を契機に*lamin*に入ってくる姻族たちによって、この連帯が危機にさらされることもあるのである。

## V 考察

ここで、「house」としてのドゥスン族の*lamin*の特徴として、以下の4点が指摘できよう。

- 1) *lamin*は、家族的な集団であり、村落社会の構成単位となっている。個人は、*lamin*の構成員となることで社会的な存在となっている。
- 2) *lamin*には呪術的な永続性があり、建物が年月を経て朽ちても、*lamin*は次の世代に順次相続される。
- 3) 法的に個人の所有権が認められている土地のような財産も、その個人が所属する*lamin*の所有と読み替えられて語られる。
- 4) 成員同士がシブリング関係にある*lamin*同士の間には、家宝や土地について、時に柔軟に、時に敵対的に、つまり戦略的に対応する関係が結ばれている。ただし、事例5で見たように、結

婚によって*lamin*に加入してくる姻族の存在によって、シブリングの連帯が危険にさらされる可能性がある。

この様な特徴を持つドゥスン族の*lamin*であるが、ここで、イバン族のビレック家族との比較を交えて、考察してみたい。

ドゥスン族と同じボルネオ島に居住するイバン族の家族的な小集団について、内堀（2003）は、非常に興味深い分析を行っている。内堀は、フリーマンの古典的研究を批判的に再検討し、ビレック家族の本質を、その歴史やその経緯には求めず、「永続することが望まれる、未来志向集団」であると指摘している。また、個々人の行為の戦略性こそが、ビレック家族の自立性と、さらには社会全体の生存基盤であるとしている。

ドゥスン族の社会においては、人々は、*lamin*の始祖や祖先について、個別に特定することなく、人々の記憶にある系譜関係は直近3世代程度であり、また、*lamin*は祖先崇拜とは結びついていない。KN村の35の*lamin*について、その継承の世代深度を確認したところ、継承を3世代以上遡って確認することができる*lamin*は、半数以下の16でしかない。また、6世代以上遡ることができる*lamin*は、わずか3つだけである。多くの*lamin*が新しく発生したものなのであり、あるいは*lamin*の生成や継承の物語は、必ずしも長く子孫に引き継がれることはないといえる。

つまり、ドゥスン族の*lamin*は、内堀がビレック家族に対して指摘したのと同様、「将来、永続することが願われる、未来志向的な集団」でありながら、しかし一方で「必ずしも、永続するとは限らない」集団である。新しいものがどんどん生まれる一方で、消えていく*lamin*も多く、また*lamin*の記憶と記録は、社会の中で、必ずしも長く受け継がれていく訳ではないということである。

ところで、イバン族のビレック家族では、一人の人間は、一つのビレック家族にだけ所属する。しかし、ドゥスン族の*lamin*メンバーは、語りの上では、流動的である。*lamin*は、あたかも、関係性のカテゴリーとしての「家族」のような用語として使われる。事例3で、父親が、既に独立した息子を、自分の*lamin*のメンバーとして語ったように、*lamin*のメンバーの範囲は伸縮自在に操作されうるのである。そしてさらに、事例5の、年老いた親が、子ども夫婦を置き去りにして、別の家屋へ*lamin*を移す、という例からも分かるように、*lamin*の生成そのものも、戦略的に行われるのである。

本稿では、ドゥスンの族社会において、親族が実践される場としての集団、「house」としての*lamin*の特徴を明らかにした。例えば*lamin*の生成について紹介した事例で見られたように、個人個人が特定の状況下で行う行為は、親族の実践にほかならない。人々は、*lamin*と*lamin*の間で、財産に対する権利を融通しあい、また、日常的な互助関係を結んでいる。あるいは、場合によっては、個人があたかも複数の*lamin*に所属するかのようには語られたりもする。そのような社会的行為もまた、親族の実践であり、その背景には、個々人が一定目標の達成のために選択する「戦略」があるはずである。*lamin*と*lamin*の関係性をめぐる実践に見られる「戦略」の分析を通して、「house」同士の関係をめぐる通時論的研究を展開することが、今後の課題である。

## 付記：

本稿は、日本文化人類学会第40回研究大会（2006年6月4日、於・東京大学）にて口頭発表した「ボルネオ島・ドゥスン族の村落における社会集団としての「家」」の内容に、大幅に加筆・修正したものである。なお、本研究の一部は、財団法人日本科学協会の平成18年度笹川科学研究助成を受けて実施した。記して感謝します。

## 参考文献

- Appell, G. N. (1976) Introduction, In G. N. Appell (ed.) *The Societies of Borneo*, pp.1-15
- Bourdieu, P. (1977) Outline of a Theory of Practice, Nice, R.(trans.) Cambridge, Cambridge Univ. Press
- Carsten, J. (1995) Houses in Lankawi: stable structures or mobile home?, In Carsten, J. & Hugh-Jones, S. (ed.) *About the House: Levi-Strauss and Beyond*, Cambridge Univ. Press
- Carsten, J. & Hugh-Jones, S. (ed.) (1995) *About the House: Levi-Strauss and Beyond*, Cambridge Univ. Press
- Embre, J.F. (1950) Thailand: a loosely structured social system, *American Anthropologist* 52: 181-193
- 遠藤 央 (1986) 「<イエ>概念の可能性－東インドネシアの事例を手がかりとして」『社会人類学年報』12：55-85
- Errington, S. (1989) *Meaning and Power in a Southeast Asian Realm*, Princeton, Princeton Univ. Press.
- Freeman, J.D.(1960) The Iban of western Borneo, In G. P. Murdock (ed.) *Social Structure in Southeast Asia*, New York: Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research Inc.,pp.65-87
- (1961) On the concept of the kindred, *Journal of the Royal Anthropological Institute* 91: 192-220  
 (「キンドレッドの概念について」笠原政治（訳）武村精一（編）『家族と親族未来社 pp.199-229]
- Joyce, R. & Gillespie, S. (ed.) (2000) *Beyond Kinship: Social and Material Reproduction in House Societies*, Philadelphia, Univ. of Pennsylvania Press
- King, V. T. (1978) Introduction, In V. T. King(ed) *Essays on Borneo Societies*, Oxford University Press. Oxford
- 小池 誠 (1989) 「イエとムラ－インドネシア・東スンバ社会におけるイデオロギーと現実－」『民俗学研究』54-2：137-165
- (2003) 「「家」の人類学的研究－レヴィ＝ストロースからブルデューへ－」『国際文化論集』29：237-264
- (2005) 『東インドネシアの家社会－スンバの親族と儀礼－』, 晃洋書房
- Kuper, A. (1982) Lineage Theory: A Critical Retrospect, *Annual Review of Anthropology*, 11:71-95.
- Levi-Strauss (1982) *The Way of the Masks*, Modelski, S. (trans.), Seattle, Univ. of Washington Press
- (1987) *Anthropology and Myth: Lectures 1951-1982*, Willis, R. (trans.) Oxford, Blackwell

- MacKinnon, S. (1991) *From a Shattered Sun: Hierarchy, Gender and Alliance in the Tanimbar Islands*, Madison, Wisconsin: Univ. of Wisconsin Press
- 三浦哲也 (2001) 『東マレーシア山間部農耕民ドゥスン族の生計維持機構』筑波大学大学院修士課程環境科学研究科学位論文
- Murdock, G. P. (ed.) (1960) *Social Structure in Southeast Asia*, New York, Wenner-Gren Foundation for Anthropological Research, Inc., pp.1-14
- 清水昭俊 (1987) 『家・身体・社会：家族の社会人類学』, 弘文堂
- 内堀基光 (2003) 「サラワク・イバン社会における小家族の編成と機略的行為」『アジア・アフリカ言語文化研究』 65:pp.1-18
- 上杉富之 (1999a) 「民族と文化の創造－東マレーシア・サバのカダザン人の事例から」田村克己編『文化の生産』, ドメス出版
- (1999b) 『贈与交換の民族誌』, 国立民族学博物館
- Waterson, R. (1990) *The Living House: An Anthropology of Architecture in South-East Asia*, Kuala Lumpur and Singapore: Oxford Univ. Press.
- (1995) Houses and Hierarchies in Island Southeast Asia, In Carsten, J. & Hugh-Jones, S. (ed.) *About the House: Levi-Strauss and Beyond*, Cambridge Univ. Press
- 山本博之 (1993) 「サバのマレーシア加入とカダザンナショナリズム」, 『アジア経済』 34(11), pp.18-36
- (2002) 「カダザン人のナショナリズムとエスニシティ」, 『ODYSSEUS』 6, pp.41-60
- (2006) 『脱植民地化とナショナリズム』, 東京大学出版会